

中山正光様

返信もせず申し訳ありませんでした。本のこと、できるだけわかりやすくと心がけておりますが、読みにくい所も多いと思います。お読みいただけるとは思っておりませんでしたのでお許しください。以下に手抜きの記事を記しました。

故郷に帰る余裕がようやくできたと思ったら、近所の方々への遠慮で現役時代以上に帰れません。こちらでは結構町歩きを続行しています。むろん一人で。現住地は田舎以上に里山が広がっており、鬱屈するとその里山に出かけてもいます。

でも、お互い慎重にならなければなりませんね。

2021年2月5日 佐藤義雄（11組）

.....
ほぼ71になるまで前線で働き、同窓会や同級会のお誘いに参加することができませんでした。退職してやれ一息、たまには旧交をと思ったら不測の事態。ままなりません、それも仕方ないこと、「必要・火急」のことなどあるはずもなく、素直に籠っています。

「便り」は時々開いてみたりしています。いずれも懐かしいのですが、さすがに「訃報」はこたえます。きちんとした「礼」を果たしておりませんが、その都度哀悼の真似事だけはしております。

退職してギリギリで不得意なネット授業などしないで済みましたが、時折オンデマンドなどの仕事が舞い込み、パソコンに向かって、「ぶち壊してやる」と罵声を浴びせたりしています。「ラッダイト Luddite」。可愛がれば彼らも可愛いのでしょうか。

ちょっとした弾みから、2020年6月に出した『文学の認知空間』のことが中山さんに知られてしまい本をめぐる感想を書けというお達し。感想も特に何も無いのですが、それも愛嬌のないこと。仕方がないので本の「あとがき」を写しておきます。

『文学の風景 都市の風景』を出版したのは2010年のこと。少し時間をおいて続編を出す予定だったが11年かかってしまった。2020年3月、長年勤務した明治大学文芸学専攻・文芸メディア専攻を退任する折にと考えていたが、前年度に体調不良に陥り、叶えることができなかった。(略)

定年はやはり一つの区切り、その後のありあまる「自由」をどうしようかとのぜいたくな悩みもあり、また、否応なく自分の半生を顧みざるを得ないようなところもあって、365日の連休、時間はあるものの決して心穏やかな定年後というわけにはいかなかった。だが、現実の生活はどうということもない。相変わらずテキストを読み続け、街歩きを重ね、研究論文や資料を探し、という歩みを、速度をだいぶ落としながらのんびりと持続している。若い学生の生気を吸ってというわけにはいかないが、それでも長いつきあいの明治大学リバティアカデミーの社会人講座の受講生が待っていてくれる(多分)

という張りもある。もう一冊の単著を出すことは不可能だろうが、それでも論文めいたものを書き続けていきたい。一冊の本にまとめ、あらためて論じたい、論じなければならぬテキストが確認でき、また、展望もないまま「以後の課題である」などと記してきた問題も多い。研究に終わりなどない。

『文学の風景 都市の風景』の後、2014年に若い頃の旧論文を中心に『昭和文学の位相 1930—45』（雄山閣）を出したが、それを読み直してみると、無手勝流の私の「研究」も案外さまざまな研究者たちの影響を受けてきたことに気づかされる。（略）

終章は書きあぐねた。「理屈」のようなものを付さなければ本としての体裁が付かないだろうというような強迫観念に襲われてのことなのかもしれない。もともと「理屈」らしい「理屈」などないにもかかわらず。ただ、文学テキストの空間が、意図的であるかどうかを越えて「認知空間」であるという確信はある。その確信が具体的な<論>にまで高められているか、と自らに問うことは大変厳しいことなのだ。

おおらかな「人間賛歌」の文学も実在するが、写実・ロマンの差を越えて、日本近代文学は人間や社会の「暗い部分」を常に問題にし続けてきた。私の街歩きもそれに従って、都市の暗部にことさらに目を向けるようなところがあった。それが私の「認知」なのだが、日本近代文学の都市の「認知」でもあると言いたいところである。（略）

2020年5月16日

佐藤 義雄

【写真：左『文学の風景 都市の風景』（2010年刊）、右『文学の認知空間』（2020年刊）

